

スワヒリ語マクンドゥチ方言の指示詞の近称と中称には、二音節の基本形に加え、一音節の縮約形が存在する (Racine-Issa 2002)。縮約形は、基本形と異なり、名詞を修飾できず、接語として直前の語に付随する。また、縮約形には、主題表現と指示対象を共有できる、その使用が指示対象が主題である場合に限定されるという特筆すべき性質もある (Güldemann 1992)。その一方で、基本形と同様、縮約形でも、近称と中称は区別され、1/2 人称の指示対象が表されることはない。こうした縮約形の、指示詞らしい特徴と、指示詞らしくない特徴は、容認性判断を含むさまざまな記述的観察に基づき示すことができるものの、相反する特徴の有機的関連を見出すことは容易ではない。

スワヒリ語以外のバントゥ系言語では、言語によって、目的語標識が動詞に後続することがあり、マクンドゥチ方言の指示詞縮約形も、こうした目的語標識と似た形で、動詞に後続して、節内の目的語と同一の対象を指すことがある。また、バントゥ系言語の目的語標識が、指示詞に由来するもので、漸次的な発達の過程で主題を表す代名詞が生じるという仮説も提案されている (Givón 1976)。ほかのバントゥ系言語との対照や、通言語的観察に基づく言語変化に関する仮説を考慮にいと、マクンドゥチ方言の指示詞縮約形は、目的語標識の発達過程の初期の段階に位置付けることができ、上述の観察は、すべて、縮約形が変化の過程にあることを示す特徴として、一つのシナリオのなかに含めることができる (Furumoto, to appear)。

本発表では、指示詞縮約形をはじめとするマクンドゥチ方言の特徴を紹介しながら、言語変化に関する妥当な想定をおくことで、一見すると無関係に見える共時的事実を関係づけ、言語の記述を整理できることを示す。文法化理論では、語彙的形式から文法的形式への変化や、文法形式の機能や形式の変化には、一定の普遍的な傾向があるとされているが (Hopper & Traugott 2003 など)、この考え方に則れば、言語変化の通言語的な傾向に関する理論的考察を参照することで、言語記述に資する示唆が得られるはずである。また、逆に、それぞれの言語の記述を押し進めることにより、言語変化の通言語的な傾向に関する理論的考察に対して、新たな知見を提供することもできる。

#### 参考文献

- Furumoto, Makoto. to appear. The grammaticalisation of Kimakunduchi demonstratives: Insights into the emergence of post-stem object markers in Bantu. In James Essegbey, Brent Henderson, Fiona McLaughlin, Michael Diercks (eds.) *Pushing the boundaries: Selected papers from the 51-52 Annual Conference on African Linguistics*.
- Givón, Talmy. 1976. Topic, pronoun and grammatical agreement. In Charles N. Li (ed.), *Subject and Topic* pp. 149–188. New York: Academic Press.
- Güldemann, Tom. 1992. Ist Swahili eine monogenetische Einheit?: Betrachtung aus der Sicht peripherer Varietäten unter besonderer Berücksichtigung der Verbmorphologie. *AAP* 30, 35–62.;
- Hopper, Paul J. & Elizabeth Closs Traugott. 2003. *Grammaticalization* 2nd. ed. Cambridge: Cambridge University Press.;
- Racine-Issa, Odile. 2002. *Description du kikae: Parler swahili du Sud de Zanzibar: Suivie de cinq contes*. Leuven: Peeters.